

「哲学は、巡り会いを超えるか？」という命題は、妻との対話からの着想である。「私は難しい理論は話せないけれど『心に描いたあの人とここであつたり出会えた！』との経験をよくするのよ」との生き活きとした物語は、静かな哲学の言葉よりも、生きた哲学を聴いたという感動を私に与えた。

私は臨床医となつて、心身医学を志向し、基礎的な比較研究のほか、主に事例研究に努めてきた。「こころ」と「からだ」の不可分な絶妙な関係を理解し、表現し、治療的に介入する心身相関理論や、治療者としては手ごわい難治な疾病への対策検討など様々の思考が去来する。何を目的に研究するのか？ ひとえに、人類社会の健全な活動を支持するため、また目の前の患者がより早く、より良く回復するために臨床医として最善を尽くしたいとの思いからである。心身医学では、生物としての人間、知性と感情を併せ持ち葛藤する人間、家族や社会のなかで生活し経済的な縛りを帯びた人間など、プリズムを変えて眺めると人間観

哲学は、巡り会いを超えるか？

山口 力

の色合いも変わって見えることを識っている。

最近、夢物語と考えられていた不老長寿、若返りの薬が、驚進的な速度の遺伝子研究により、我々が生きている近い将来に実用化されるとの話に接して、驚きを隠せない。iPS細胞の応用やナノ・テクノロジーの活用を含めて、人類の平均寿命が百歳を超える時代も遠い未来のことではないという。人類誕生から現在までの年月と比較すれば、わずかここ百年、二百年の間に、人類の平均寿命が倍するほどに延びた事実を鑑みれば、納得のいくことでもある。それほど医学研究の営みは価値のあることであり、誰人もその恩恵を被っている。翻つて、日本の高齢化率は世界一となり、65歳以上が人口の26・2%、実に4人に1人が高齢者という時代を既に迎えており、人類社会にとつては逆に大きな課題を突き付けられている。いよいよ「本当の幸福とは何か？」が問われ、真剣に議論される時代となった。まさに「生きた哲学」が求められているのである。

(やまぐち ちから／東洋哲学研究所委嘱研究員)